

になつた、今度は馭者臺へ乗つたので何處でも見える、幸ひの好天氣、お負けに頗る暖かい日だ、天城の山を後にしてゆく心持はいゝが、時々馬の尻尾で撲かれるには閉口する。大仁橋の近處はよい景色だ、汽車は大混雜、それは三島神社のお祭りだからといふこつた。

三島の乗換にブリツヂの梯子を降りる時、どうしたハツミか正男さんが足を踏外して三段ばかり墮ちた、オ、あぶないと皆んなが言ふ、正男さんは平氣な顔をしてゐたが、向脛を少く傷めたやうだ、僕は幸ひ主人の手に居たから災難を逃れたが、正男さんに持たれてゐるやうもんなら、あの硬いプラツトホームの上へ抛り出される處だつた、僕は平生も、正男さんに持たれるのは嫌ひだ、歩行ながら石の突つて見たり、水をかき廻して見たり、道わるを曳褻つたり、碌なことはいない。

夕方新橋へ着いた、東京の風は馬鹿に冷たい、宅へ歸つてこの夜は玄關の隅へ置かれたが、明日からはまた畫室へ戻つて、イーゼル君や額縁君に逢つて留守中の話でもきかう。

## ゴバルト

汀

煙

ゴバルト、自分はこの色を追想するたびいつも一種夢幻的愉快を感じるので、自分ながら不思議に耐へられない、例令ば自分が懊惱煩悶と云ふ様なクダラなき場合にも、このゴバルト色を追想するならば、奇態にも忽ち心中爽快として、丁度暗黒な溪谷中より一目茲に展開せる一大曠原に出てたかの様、得も云

はれぬ心地になるので、ゴバルトの擴大なる威力には今更ながら驚かされて居る。

同じ寫生をするにしても、どうもゴバルトの多い所に尻が据はる、遙か向ふを望めばゴバルトに少しくクリムソンレーキを加へて鼠がかつた色、夫れが段々前に來て中景の淡いエローと衝突し、互ひに入り亂れて戰ふ其色の美しさ、自分は夫れを見たら殆んど他の色は眼界より忘却して仕舞ふで、何んでも其計を描く氣になる、サテ板に向つて見ると其好きな色が申々出て來ない前景のパツトエローに耀いて濃いインヂゴやグレーの陰などは、ともすると落ち合ふ事もある、左れど遠いゴバルトやグレーだと塗る内に、ナセか色が汚くなる又重過ぎるとか寒む過ぎるとか行る度に失敗のみ、何時も自然の清新な神々しい氣色が出来ぬ、之れは自分が未だ夫れに對する力の足らぬ故でもあらうが、左りとて又餘りに齒痒い次第、で、段々考へると、コー云ふものが胸に浮んで來た、即ち先生が常に調子とか色の對照とか云ふ事を云はれた、其調子の如何によりては夫れでない色も又サウ見ゆると云ふ事である。

自分は實に夫等の重要事を没却して居つた、如何に立派な美しい物でも只の一つで繪には成らぬであらう、即ち構圖の方法とか、色の調子、明暗の度合など、あらゆる順序を完備して研究するならば、始めて自然の眞に迫るに及ぶであらう。

自分の好きなゴバルトは斯くして徐々に成功の域に近きつゝある。